

戦後、「社会科」は いかに生まれたのか

1945年8月15日を境に、日本の教育は大きく変わりました。私たちが学ぶ「社会科」は、戦後に生まれた教科です。その成立の過程や携わった人物を紹介しながら、社会科における「主体的・対話的で深い学び」の根源をたどりま。

樋口雅夫
Masao Higuchi
教育学部教授



文部科学省で教科調査官を務めるなどして、2018年から現職（写真は教職課程の授業。2018年撮影）

私

の研究領域は社会科教育、公民教育（シテイメンシップ教育）です。文部科学省で学習指導要領の改訂に携わった経験を活かしながら、全国の教育研究者や小・中・高等学校の先生方と一緒に、今春から使用される社会科の検定教科書執筆をはじめとする教材作成や、アクティブラーニングの視点を取り入れた授業づくりなどに取り組んでいます。そもそも、私が社会科の教科書研究に興味を持ったきっかけは、

ある偶然の出来事でした。大学生の時、自宅の物置を整理していたところ、埃にまみれた2冊の教科書を発見したので。それが1948、49年に発行された文部省著作教科書「民主主義 上・下」でした。この教科書は、私の父が中学生の頃使っていたもので、日本に「社会科」が誕生した直後のものだったのです。父は、その授業を受けた「一期生」ということになりました。俄然、社会科成立の歴史に関心を持った私は、社会科教育史研究の第一人者であられた片上宗二先生（広島大学名誉教授）のゼミに入れていただき、厳しくも充実した学部・院生時代を過ごすことになりました。

「社会科」成立まで

日本の学校に国語、算術などの「教科」が初めて設置されたのは今から150年近く前、明治時代初めのことでした。その後の約75年間、「社会科」という教科は存在せず、「修身」、「国史」、「地理」といった教科がそれぞれ独立して教授されていたのです。しかし、第二次世界大戦後に占領政策遂行のために日本に進駐し

たダグラス・マッカーサーをトップとする連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は、「修身」、「国史」、「地理」が国家神道の思想と結び付けられ、軍国主義や超国家主義の考え方を教える教科となっている、と考え、45年12月31日に「修身」、「国史」、「地理」の授業停止と教科書回収を命じました。一方で、日本の文部省（当時）もGHQ指令に先立つ45年11月1日にはすでに、著名な法学者の田中二郎、哲学者の和辻哲郎らを専門委員とする「公民教育刷新委員会」を立ち上げ、地理や歴史、公民に関する内容を多角的・総合的に理解させる教科を新設しようとしてみていたのです。

46年3月、GHQの招きにより、戦後日本の教育改革のためにアメリカ教育使節団が来日し、約1ヵ月にわたって日本各地の教育施設の視察を続けました。

特筆すべきは、3月26日に玉川学園を訪れている点です。当時アメリカが日本に導入しようと考えていた「社会科」は、地理や歴史政治、経済などといった学問領域によるのではなく、児童生徒自身

「社会科」以前の教科

戦前・戦中に尋常小学校（初等教育、4年制）で教えられていた教科である「修身」、「国史」、「地理」は「社会科」の前身と言える



明治、大正、昭和の時代を映す教科書

道徳科目の修身は、1880年の教育令改正によって筆頭教科となり、以後もっとも重視された（左）。国史は現在の日本史にあたる。教科書の中の絵は、「建武の新政」で知られる後醍醐天皇（左下） 地理の教科書は国内外を詳しく扱い、内容は高度である（下）以下特に記載のない限り、資料は玉川大学教育博物館所蔵



墨塗り教科書

敗戦を経て、新しい教科書の編纂・印刷が間に合うはずもなく、不都合な箇所は教員の指示により子どもたちが筆で塗りつぶした



戦後間もない時期の教育現場の混乱

国民学校2年生用『よみかた三』（1943年翻刻発行）。墨塗りにされた部分の題は「日曜日の朝」。国力増強・戦意高揚を意図して定められた興亜奉公日（毎月1日）に因って扱っているため墨塗りの対象となった

米国教育使節団

1946年3月、日本の教育事情を調査するために米国から総勢27名の教育使節団が来日。各地の教育機関を訪れる中で、玉川学園にも来園した



使節団の感想は「外の学校と全然ちがふ」

GHQからの案内役を含めて4人が来園した。彼らは学園内を視察。自学、労作、音楽、舞踊、体操などを見た。創立者小原廣芳と懇談し、児童生徒とも交流した。団員らが「子供達が明るくて、日本の外の学校と全然ちがふ」と感想を述べたことを、創立者が書き残している。写真は、1942年に設立された興亜工業大学（現千葉工業大学）の「予科本館」として建てられた本部棟（現存）の前で撮影された

「社会科」関連年表

1872（明治5）年

文部省、学制発布。「修身」、「国史」、「地理」が講じられるようになる

1886（明治19）年

小学校教科書の検定制設置。その後、1903（明治36）年に国定教科書制度が実施され、1945年まで続く

1941（昭和16）年

小学校が初等科と高等科を持つ「国民学校」に。初等科では国民科の中に「修身」、「国語」、「地理」、「国史」が科目として立てられた

1945（昭和20）年

日本が連合国に降伏。GHQが4大教育指令のひとつ「修身、日本歴史及び地理停止に関する件」で3教科の停止、教科書回収など指令

1946（昭和21）年

3月5日、第1次米国教育使節団来日。26日、玉川学園に来園。9月5日、国定国史教科書『くにあゆみ』発行

1947（昭和22）年

社会科設置に向けた学習指導要領の作成作業開始。社会科の実験授業が始まる。新たに「家庭科」、「自由研究」を設置

1948（昭和23）年

社会科の内容を含む『民主主義』発行

1954（昭和29）年

文部省「社会科の指導計画に関する資料」通達。小学校高学年に地理学習導入

1958（昭和33）年

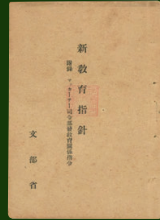
学習指導要領改訂において、地理、歴史教育の充実改善が図られた

1992（平成4）年

1989年の学習指導要領改訂を受け、「体験を重視する教育への積極的な対応」などを目的に、小学校低学年の社会科と理科を廃止して「生活科」を設置

戦後占領期の変革

軍国主義および極端な国家主義思想の普及を禁じ、GHQが矢張りに出した指令は、日本の教育の方向性を大きく変えた



『新教育指針』

1946年5月、教員向けに配布された手引書である『新教育指針』は、「日本側で編集した最初の体系的な民主教育の手引書として、当時の教員たちへの指針となった」(『学制百二十年史』文部科学省)



『学習指導要領(1) 社会科編(試案)』

1947年3月の「一般編」に続き、同年5月に刊行。「一般編」では、社会科が「今日のわが国民の生活から見て、社会生活についての良識と性格とを養うことが極めて必要であるので、設けられた」と説明されている

新しい教科書と名著

「修身」、「国史」、「地理」に代わって新しく生まれた「社会科」では、教科書が新しくつくられたが、戦前発行のロングセラーの影響も見えるものだった



『民主主義』

文部省著作の社会科教科書で、当時を代表する研究者たちが執筆に関わっている。上巻は1948年、下巻は1949年刊行。中学・高校の社会科教科書に1953年まで使われた。近年は復刻もされている



『村の子ども』

文部省著作の社会科教科書のひとつである本書は小学5年生用のものである。農漁村の暮らしが文章と絵で語られている。写真は『君たちはどう生きるか』において、『コベル君』が気づきを得た箇所へのオマージュと思しき記述の所で見られるページ。牛乳が牧場から集乳所などをへて消費者のもとへ流れる流れが、物語的に書かれている



『君たちはどう生きるか』

少年「コベル君」が叔父や周囲との交流を通して成長する姿を描く。初版(1937年刊)。玉川大学教育学術情報図書館所蔵)は作家の山本有三と吉野源三郎(ジャーナリスト)の共著だが、戦後発行の書籍では吉野の単著に

「社会科」誕生に関わった上田薫の著作

課題解決をともなう「社会科」のあり方を生涯追究した上田薫は、教育を中心に幅広く著作を残している



『よみがえれ教師の魅力と迫力』

玉川大学出版部
1990年代後半、「学習指導要領」に登場した「生きる力」に関する論考「生きることの教育」やあるべき教師像を綴った「ひとりひとりを生かす教師」などのほか、学徒出陣の頃など青年時代の回顧からなるエッセイ集



『私はいつまで生きていてよいか』

亜紀書房
老いがテーマのエッセイ集ではあるが、「教育は不完全な教師が不完全な子どもを導くもの」「人間理解こそがすべての鍵を握っている」など、教育哲学に基づく論考も展開



『西田幾多郎歌集』

岩波文庫
祖父の短歌を上田が編み、解説を付したものの。解説では自身の教育哲学において受けた西田からの影響や西田のモットー、「一日不作一日不怠」などにも触れている

教科書と子どもたちの学び

戦後の文部省で学習指導要領作成に尽力された一人が上田薫先生です。上田先生は哲学者西田幾多郎の孫にあたり、京都帝国大学哲学科で学び、学徒出陣。戦後文部省に入省して、日本に「社会科」を成立させた後、名古屋大学などで教鞭を執られ、都留文科大で長を長く務められた教育者です。私は大学院生の時、恩師片上先生

し、自ら追究し、自ら解決策を見いだすことをねらいとする教科書とした。使節団の一行は、当時の玉川学園で行われ、2020年代の現在も続く「自由研究」に、「社会科」の理想を重ね合わせたことでしょうか。視察を受けた時、玉川学園にはすでに社会科研究部が設置されていました。創立時から掲げる教育理念を活かし、「社会科」という教科をどのように創るか、当時、自由闊達な議論が行われたことは想像に難くありません。

37年に発行された吉野源三郎の名著「君たちはどう生きるか」(新潮社)で、主人公のコベル君が粉ミルクの生産・流通・消費に關して、「人間分子の關係、網の目の法則」と名付けた名場面へのオマージュであり、日本の社会科は、アメリカの社会科をただ直訳しただけのものではなく、日本で、日本人が成立させたものなのだ、との上田先生の矜持を表す一節である、と思わせるを得ません。

中でも、「村の子ども」では、主人公の信一君が、病気で飲んだ牛乳をもとに、その牛乳が酪農家の三郎さんとなつたり、運送屋さんとなつたり、その他様々な人々とつながっていることを発見し、「私たちがこの社会の中で、どうと網の目のようになつて生きていく」ことに気づく過程を、手紙の交換、という形で綴っていました。これは、時を遡ること11年前

初期社会科の教科書は、戦前の教科書しか知らない当時の子どもたちにとって、ページを開くだけで学ぶ意欲をかき立てられる、斬新な形式だったと言えるでしょう。翻って現在の小学校教科書を見てみると、社会科に限らず様々な教科の教科書で、上記①②③の形式を取り入れて編集・執筆されていることに気づかされます。上田先生が考案された教科書における児童中心主義的な記述形式と学びの在り方は、戦後75年が過ぎた現在においても目指されている「主体的・対話的で深い学び」の在り方にもつながっているのです。

私が入り組む教育学研究も同じかも知れませんが、数年後、数十年後の子どもたちの姿を思い描き、進める地道な教育・研究活動。そんなことを考えながら2冊の教科書を再び書棚に収めました。

「社会科」の学びの本質
このエッセイを執筆するにあたり、久しぶりに社会科教科書「民主主義 上・下」を聞くと、はしみな「民主主義の根本は、(中略)みんなの心の中にある。すべての人間を個人として尊敬な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である。」とあり、なるほどと頷きながら、つい最後まで読み進めてしまいました。民主主義は、物事を実行するのに手間もかかれは無駄も多い。しかしそれは、社会を営むための必要経費と捉えられるでしょう。特効薬ではないものの、よりよい社会を築いていく際に、じわじわと効き目が現れる漢方薬のようなものです。

きているのだと感じるこのように、私は研究の醍醐味を感じます。2019年、上田薫先生は満99歳の天寿を全うされました。